

Strix 7 : 231-238 (1988)

北海道東部地方斜里の防潮保安林とその周辺における夏期の鳥類相

大迫義人¹

はじめに

北海道東部地方の斜里にある防潮保安林は、周囲を海、沼、草原、畑地に囲まれた特異な立地条件を示している。この林は海岸林かつ平地林でありながら、高木層が発達し複雑な植生を形成しているため、山地性も含め豊富な生物相を示している(川道 1981)。加えて、この林は森林の構造、面積、隔離の程度等について調査しやすく、動物の群集、個体群の研究に適していると考えられる。そこで今回、この防潮保安林とその周辺の鳥類相について調査を行なってみた。

斜里近辺の鳥類相については、濤沸湖周辺で城殿(1979)、知床半島で中川(1988)による総括があり、川湯周辺では百武(1977)、標茶では二村(1987)等の報告がある。斜里町管内の鳥類はすでに45科210種が確認されている(森 1979)。この防潮保安林でも、21科50種の鳥が報告されているが(川道 1981)、今回、新たに生息や繁殖の確認された種があり、また生息密度についても調査したので報告する。

調査地と方法

調査は、1988年7月17日～24日の間に、北海道斜里郡斜里町にある国有林141林班

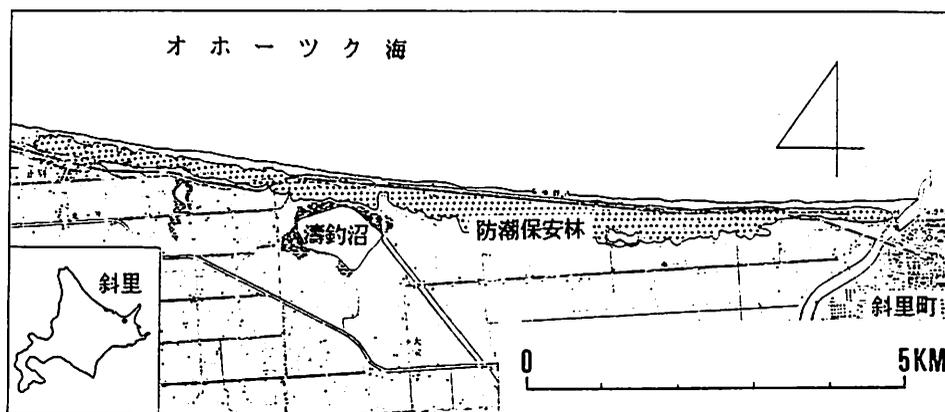


図1. 斜里の防潮保安林(点部)とその周辺の地図

Fig. 1. Map of a windbreak forest (dotted area) and its vicinity in Syari, eastern Hokkaido.

1988年12月15日受理

1. 〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部動物社会学研究室.

(43°55' N, 144°40' E) の防潮のための高木林 (一部草原を含む) と、そこから北の海岸へと続く低木林と草原、南西に隣接する濶釣沼及び南に広がる畑地で行なった (図1)。防潮保安林の環境については、川道 (1981) が詳述しているので省略する。低木林は、イタヤカエデ *Acer mono*, ナナカマド *Sorbus commixta*, ノリウツギ *Hydrangea paniculata*, ヤマハギ *Lespedeza bicolor*, ハマナス *Rosa rugosa* 等の低木と、ハマボウフウ *Glehnia littoralis*, エゾスカシユリ *Lilium maculatum var. dauricum*, エゾカワラナデシコ *Dianthus superbis var. superbis*, エゾフウロ *Geranium yesoense var. yesoense* 等の草本よりなっている。各階層の高さは、低木は約3m, 草本は約50cmであった。濶釣沼は、周囲2.9kmの浅い沼で、周囲をイワノガリヤス *Calamagrostis langsdorffii*, オオカサスゲ *Carex rhynchophylla*, アブラガヤ *Scirpus wichurae* 等よりなる湿原に囲まれていた (森 1979)。畑地ではコムギ, ジャガイモ, サトウダイコン等が栽培されていた。

高木林の林内では、36メッシュのカシミ網を0.50~4.10m (網を2段) の高さで60mの長さに張って、捕獲を2,245分間行ない、またのべ距離12.3kmのラインセンサスを473分間と定点観察を2,395分間行なって、確認した鳥の種類を記録した。林縁では、カシミ網を0.75~3.15mの高さで20mの長さに張って、捕獲を2,245分間と定点観察を142分間行なって、鳥の種類を記録した。またここでは、幅30m, 長さ983mのラインセンサスを往復5回行ない、鳥の生息密度を推定した。低木林では、カシミ網を0.50~2.30mの高さで132mの長さに張って、捕獲を1,590分間と定点観察を1,620分間行なって、鳥の種類を記録した。濶釣沼では定点観察を20分間行ない、畑地では適宜、観察を行なった。

ハシブトガラとコガラの識別は、尾羽の形とくちばしの高さの計測値の違いに基づいて行なった (安部・黒沢 1976)。

結 果

各環境で確認された鳥の種は、表1に示した。

1) 各環境における種構成

高木林

この環境では最も多くの種が確認された。海岸より100mと離れていない場所にもかかわらず、内陸の山地に生息するオオタカ, エゾライチョウ, アカゲラ, コアカゲラ, トラツグミ, アカハラ, エゾムシクイ, センダイムシクイ, キビタキ, エナガ, ハシブトガラ, ヒガラ, ゴジュウカラ, ニュウナイスズメ等が出現した (百武 1977; 二村 1988)。逆に海鳥類は、ほとんど出現しなかった。

またオオタカ, エゾライチョウ, ハリオアマツバメ, コゲラ, トラツグミ, エゾムシクイ, コサメビタキ, エナガは、高木林の内部にしか出現せず、逆に低木林に多かったアカモズ, ノゴマと畑地に多かったノビタキは林縁にも出現した。

なおハシブトガラとコガラの2種については、捕獲、観察で確認できたのはハシブトガラだけで、確実なコガラの確認は得られなかった。

低木林と草原

海に近いために出現したキアシシギ, オオセグロカモメを除いて、チゴハヤブサ, エゾセンニュウ, ホオアカは、この環境にしか出現しなかった。ここではアカモズ, エゾセンニュウ, ノゴマが優占種であった。また高木林で多く確認されたアカハラ, ハシブトガラ

表1. 北海道斜里の防潮保安林とその周辺における夏期の出現鳥リスト

Table 1. List of bird species in summer in a windbreak forest and its vicinity in Syari, eastern Hokkaido

目 Order	科 Family	種 Species	学名 Scientific name	生息環境 Habitat				
				高木林内 Forest interior	高木林縁 Forest edge	低木林 Scrub	沼沢地 Marsh	畑地 Farmland
コウノトリ	サギ	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>		○(通過)		○	○
ガンカモ	ガンカモ	*マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>				○	○(水路)
ワシタカ	ワシタカ	トビ	<i>Milvus migrans</i>	○	○	○		○
		オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>				○	
		オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	○				
	ハヤブサ	チゴハヤブサ	<i>Falco subbuteo</i>			○		
キジ	ライチョウ	エゾライチョウ	<i>Tetrastes bonasia</i>	○				
チドリ	チドリ カモメ	キアシシギ	<i>Tringa brevipes</i>				○(通過)	
		オオセグロカモメ	<i>Larus schistisagus</i>				○(通過)	
ハト	ハト	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	○	○	○		○
		アオバト	<i>Sphenurus siboldii</i>	○	○			
ホトトギス	ホトトギス	カッコウ	<i>Cuculus canorus</i>	○			○	
		ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>				○	
アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>		○(上空)			
		ハリオアマツバメ	<i>Chaetura caudacuta</i>		○(上空)			
ブッポウソウ	カワセミ	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>				○	
キツツキ	キツツキ	*アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	○	○			
		*コアカゲラ	<i>Dendrocopos minor</i>	○	○			
		コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki</i>	○				
スズメ	ヒバリ	ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>					○
	セキレイ	*ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>					○
	ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>				○(通過)	
	モズ	*アカモズ	<i>Lanius cristatus</i>		○	○	○	
	ヒタキ	ノゴマ	<i>Erithacus calliope</i>		○	○		
		*ノビタキ	<i>Saxicola torquata</i>		○		○	○
		*トラツグミ	<i>Turdus dauma</i>	○				
		*アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	○	○		○	
		エゾセンニュウ	<i>Locustella fasciolata</i>			○		
		オオヨシキリ	<i>Acrocephalus arundinaceus</i>				○	
		*エゾムシクイ	<i>Phylloscopus tenellipes</i>	○				
		*センダイムシクイ	<i>Phylloscopus occipitalis</i>	○	○			
		*キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	○	○			
		*コサメビタキ	<i>Muscicapa latirostris</i>	○				
	エナガ	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	○				
	シジュウカラ	*ハシブトガラ	<i>Parus palustris</i>	○	○	○		
		*ヒガラ	<i>Parus ater</i>	○	○			
		*シジュウカラ	<i>Parus major</i>	○	○			
	ゴジュウカラ	*ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	○	○			
	ホオジロ	ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i>			○		
		シマアオジ	<i>Emberiza aureola</i>					○
		*アオジ	<i>Emberiza sspodocephala</i>	○	○	○		
	アトリ	*カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	○	○	○		
		*ベニマンコ	<i>Uragus sibiricus</i>	○	○	○		
		シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	○	○			
	ハタオリドリ	*ニューナイスズメ	<i>Passer rutilans</i>	○	○			
		スズメ	<i>Passer montanus</i>					○
ムクドリ	*コムクドリ	<i>Sturnus philippensis</i>	○		○			
カラス	*ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	○				○	
	*ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	○	○			○	
科数 No. of families		25		15	13	12	7	10
種数 No. of species		49		30	23	16	10	11

注) *: 繁殖の確認された種 Breeding species

がここにも出現した。

沼沢地

水辺でアオサギ、マガモ、オジロワシ、カワセミ、オオヨシキリと、開けた疎林でカッコウ、ツツドリ、ヒヨドリが観察された。その中でオジロワシ、カワセミ、オオヨシキリ、ツツドリ、ヒヨドリは、この環境でのみ観察された。20分と短時間の調査にしては10種もの鳥が観察された。

畑地

ヒバリ、ハクセキレイ、シマアオジ、スズメは、この環境でしか観察されなかった。アオサギ、ノビタキ、カラス類は、他にも観察されたがここで最も多かった。この環境での出現種は、もっと多かったと考えられるが、11種と少なかったのは、観察に十分な時間を費やさなかったためである。

2) 防潮保安林（高木林）での生息密度

個体数密度調査のラインセンサスで出現した鳥は、23種で、そのうちヒガラ、アオジ、カワラヒワの密度が高かった（表2）。ただ各々の種は、林内に一様には生息しておらず、保安林の大半を占める高木林内では、キビタキ、ヒガラ、ハシブトガラの、林縁から草原ではアオジ、ベニマシコの密度が高かった。

3) 繁殖状況

調査した期間が大半の鳥の繁殖期にかかっていたので、旅鳥であるキアシシギと調査地内に営巣場所のないオオセグロカモメを除いて、確認できた種は、すべて繁殖の可能性がある。そのうち親の抱卵斑（アカハラ、シジュウカラ、アオジ、ベニマシコ）、給餌活動（コアカゲラ、アオジ、ニュウナイスズメ、コムドリ）や巣立ちピナ（アカモズ、トラツグミ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、キビタキ、コサメビタキ、ヒガラ、シジュウカラ、ベニマシコ）、幼鳥（アカゲラ、コアカゲラ、ノビタキ、トラツグミ、アカハラ、センダイムシクイ、キビタキ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ハシボソガラス、ハシブトガラス）の存在等で実際に繁殖が確認できたのは、12科23種であった（表1）。

考 察

川道（1981）の報告に比べ、今回、防潮保安林でアオサギ（通過）、オオタカ、エゾライチョウ、アオバト、アマツバメ（上空）、ハリオアマツバメ（上空）、エゾムシクイ、コサメビタキが新たに確認された。逆に、川道によって夏期に観察されたヤマシギ *Scolopax rusticola*、オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos*、クロツグミ *Turdus cardis*、コガラ *Parus montanus*、キバシリ *Certhia familiaris*、ムクドリ *Sturnus cineraceus* は、今回確認できなかった。これらの6種も含め、夏期の防潮保安林で、これまでに計40種の生息が確認されたことになる。その内繁殖していると思われるのは36種である。この林は、面積が約345haであるので、樋口ほか（1982）によると約23種の鳥が生息できることになるが、ここではその1.6倍の種数の鳥がいることになる。このように鳥種の豊富な理由は、防潮保安林が、幅は300～400mながら11.5kmもの長さがあり幾つかの異なった環境を含んでいるためと、高木層、亜高木層、低木層、草本層と森林構造が複雑であるためと考えられる。そして、この林に、海岸の低木林、草原と沼沢地、畑地が隣接して狭い範囲に様々

表2. 防潮保安林における鳥の生息密度

Table 2. Population density of birds in a windbreak forest

種 Species	学名 Scientific name	個体数密度 Density mean±s.d. (羽/ha)
トビ	<i>Milvus migrans</i>	0.07±0.09
キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	0.20±0.14
アオバト	<i>Sphenurus siboldii</i>	0.20±0.30
アマツバメ	<i>Apus pacificus</i>	0.10±0.23
ハリオアマツバメ	<i>Chaetura caudacuta</i>	0.07±0.15
アカゲラ	<i>Dendrocopos major</i>	0.07±0.09
コアカゲラ	<i>Dendrocopos minor</i>	0.14±0.22
アカモズ	<i>Lanius cristatus</i>	0.03±0.07
ノビタキ	<i>Saxicola torquata</i>	0.07±0.15
アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i>	0.68±0.40
センダイムシクイ	<i>Phylloscopus occipitalis</i>	0.37±0.33
キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	0.58±0.39
コサメビタキ	<i>Muscicapa latirostris</i>	0.20±0.45
ハシブトガラ	<i>Parus palustris</i>	0.95±0.65
ヒガラ	<i>Parus ater</i>	1.46±1.01
シジュウカラ	<i>Parus major</i>	1.02±0.56
ゴジュウカラ	<i>Sitta europaea</i>	0.61±0.64
アオジ	<i>Emberiza spodocephala</i>	1.97±0.92
カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	1.97±0.28
ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus</i>	0.95±0.53
シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes</i>	0.17±0.17
ニューナイスズメ	<i>Passer rutilans</i>	0.17±0.12
ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	0.07±0.09
不明	Unknown	0.14±0.14

注) 個体数密度は、5回のラインセンサスで得られた数値の平均を出した。

Mean population density was estimated by five line census surveys.

な環境がそろっているためでもあろう。

次にこの防潮保安林は、隣接する異なった環境との境界がはっきりしており、森林面積や他の森林からの距離を計測しやすいし、また森林構造の分析もたやすいようにみえる。そして林内はほとんど平坦で、鳥の調査を行なうのに非常に楽であった。

このように鳥類相が豊富で、森林の環境分析がやすく、かつ地形的に調査しやすい斜里の防潮保安林は、鳥類の群集生態学のみならず個体群生態学、動物社会学的にも価値の高い地域と考えられる。こういう観点から、大迫(準備中)は、当防潮保安林で鳥類相調査方法について比較研究している。

防潮保安林の周辺で今回確認された鳥の中で、オジロワシは近年の森林開発で減少し、北海道での繁殖個体数は20つがい以下と推定されているが(中川1988)、7月に瀟釣沼で2羽観察されたことは繁殖の可能性が示唆される。

また北海道に生息するタンチョウ *Grus japonensis* は、絶滅の危機から、やっと脱出したものの、いまだ安心できる状態ではない。特に開発により、繁殖地である湿原の減少が危惧されている(百瀬・中村 1983)。タンチョウの繁殖のためには、河川湖沼等の採食場、キタヨシ等の巣材となる植物、外敵からの安全が必要であるが(林田 1975)、濤釣沼はその条件を備えているようにみえる。実際、過去に当沼でタンチョウが観察されているし(森 1979; 正富ほか 1983)、10kmと離れていない濤沸湖では、繁殖が確認されている(正富ほか 1982)。

その他、ヒメクビワカモメ *Larus roseus* (森 1976; 中川 1987) のように日本でまだ2, 3例しか観察されていない種やキンメフクロウ *Aegolius funereus*, クマゲラ *Dryocopus martius*, ユキホオジロ *Plectrophenax nivalis* 等の稀少種も観察されている(森 1979)。

鳥類相の豊富さもあわせ、防潮保安林とその周辺は、稀少種保護のためにも重要な地域と考えられる。

謝 辞

調査地でお世話になった山崎徳治さんとそのご家族の皆さん、川道美枝子さん、そして快く調査の許可を出して下さいました斜里営林署と網走支庁の皆さんに感謝いたします。また捕獲調査を村上ゆか、井上美智子、斉藤めぐみ、喜多見由紀さんらに手伝ってもらいました。あわせて感謝いたします。

要 約

1988年7月17日～24日、北海道斜里郡斜里町にある防潮保安林とその周辺で鳥類相の調査を行なった。カスミ網による捕獲、ライセンスサスと定点観察による方法で、25科49種の鳥の生息が、そのうち12科23種の鳥の繁殖が確認された。防潮保安林では生息密度も調査し、密度の高さが示唆された。この種多様性の高さは、防潮保安林の森林構造の複雑さと低木林、草原、海、沼、畑地など異質の環境が隣接していることによると考えられる。豊富な鳥類相とあわせ、調査地の環境分析や実際の調査のしやすさから、この地域は鳥類相分析の研究に適していると考えられる。またオジロワシやタンチョウ等の稀少種の生息し得る場所としても、当地域の重要性が示唆される。

引用文献

- 安部直哉・黒沢収. 1976. ハシブトガラとコガラの形態上の相異について. 山階鳥研報 46: 58~71.
 林田恒夫. 1975. 繁殖状況について, タンチョウ特別調査報告書, 北海道教育委員会, pp. 8~12.
 樋口広芳・塚本洋三・花輪伸一・武田宗也. 1982. 森林面積と鳥の種数との関係. Strix 1: 70~78.
 百武充. 1977. 川湯周辺の鳥 — 2年半の記録 —. 北海道野鳥だより 26: 2~6.
 川道美枝子. 1981. オホーツク海岸林の生物相とシマリスの食性. 知床博物館研究報告 3: 23~33.
 城殿博. 1979. 濤沸湖周辺の野鳥. 北海道野鳥だより 35: 3~8.
 正富宏之・安部誠典・百瀬邦和・松尾武芳・長山清美. 1982. 1982年繁殖期におけるタンチョウの分布. 専大北短紀要 15: 163~173.
 正富宏之・安部誠典・百瀬邦和・杉本剛・長山清美. 1983. 1983年繁殖期におけるタンチョウの分布. 専大北短紀要 16: 200~212.
 百瀬邦和・中村玲子. 1983. 北海道のタンチョウ保護の現状. Strix 2: 121~129.
 森信也. 1976. 北海道に渡来したヒメクビワカモメ. 鳥 25: 83~84.

- 森信也. 1979. 斜里町管内の鳥類相について. 知床博物館研究報告 1 : 1~10.
- 中川元. 1987. 知床半島におけるヒメクビワカモメの観察. 日本鳥学会誌 36 : 65~67.
- 中川元. 1988. 知床の動物群集鳥類. 知床の動物. 大森司紀之・中川元編著. 北海道大学図書刊行会. pp. 59~121.
- 二村一男. 1987. 北海道演習林の鳥類相. 京都大学農学部演習林集報 17 : 1~13.
- 大迫義人. (準備中). 捕獲. ラインセンサスと定点観察による鳥類相調査の比較.

Summer avifauna of a windbreak forest and its vicinity in Syari, eastern Hokkaido.

Yoshito Ohsako¹

The avifauna was studied in a windbreak forest and its vicinity in Syari, eastern Hokkaido in July 17-24, 1988. A total of 49 species (25 families) was recorded by line censuses, fixed-point observations, and mist net captures. Twenty three species (12 families) were breeders. The population density of birds was high in the forest. The large number of species in this area was considered to be caused by the complex vegetation structure of the windbreak forest, and by a mosaic of forest, scrub, grass land, marsh, sea, and farmland. As it is easy to measure the size, isolation, and structure of forests and scrubs, this area seems to be a good place to analyze the avifauna of eastern Hokkaido. This area should also be preserved as the habitat of rare bird species such as the White-tailed Eagle and the Japanese Crane.

1. Lab. of Animal Sociology, Dept. of Biology, Fac. of Science, Osaka City University, Sumiyoshi-ku, Osaka, 558